

性犯罪者における愛着スタイル研究の動向と展望

星 あづ さ¹⁾ 河野 莊子²⁾

1. はじめに

近年、性犯罪に対する社会の関心は高まっている。平成18年に、全国の刑務所および保護観察所で、組織的・統一的な性犯罪者再犯防止プログラムが実施されるようになったのを皮切りに、平成29年には、110年ぶりに刑法の性犯罪規定が改正された。こうした際、いつも生じる疑問がある。それは、「性犯罪者とは一体どういう人間なのか？」である。“魂の殺人”とも呼ばれる性犯罪は、被害者の人権や尊厳を蹂躪する卑劣なものであり、被害者本人のみならず、その家族や周りの人たちをも一生苦しめる非情な加害行為である。この痛ましい犯罪はなぜ起こるのか。性犯罪者はなぜこうした残酷な犯罪を起こすのか。こうした疑問に対し、海外を中心にさまざまな研究がなされてきた。その中で、生物学的、行動学的、心理学的など、さまざまな視点から性犯罪を広く一般化して説明しようとした一人にMarshall, W. L. がおり、彼は、性犯罪者の特徴として、愛着の障害を指摘している。(Smallbone, 2006a)。

2. 愛着理論の概要

2-1 愛着理論

Bowlby (1969, 1973) の愛着理論は、子どもと養育者(主に母親)との間の結びつきの重要性を唱えたもので、乳幼児と養育者との愛着関係は、発達過程にある子どものパーソナリティや社会的・感情的能力などに大きな影響を与える(金政・大坊, 2003)。

愛着理論における愛着とは、安全(safety)、安心(security)、保護への欲求(need)にもとづいた絆の3つを意味し、個人は脅威に直面した際、愛着対象との近接性(proximity)を求める愛着行動をとる(Prior & Glaser, 2006 加藤訳2008)。Bowlbyはこの近接性を重

視した個人の目的志向的行動を愛着行動システムと呼んだ。つまり、子どもが何かしらの不安や不快を感じた時、このシステムが活性化され、愛着対象である養育者を求めて、文字どおり、近接する(くっつく)ことで安心や安全の感覚を回復・維持しようとするのである。こうした子どもと養育者との間の愛着関係は、主に養育者の受容性や反応性によって規定されている。つまり、子どものさまざまな感情や要求に対し、養育者が適切に受容したり、反応したりできるかが愛着関係の性質を規定し、子どもの人格や資質に影響を与えるのである。

子どもは養育者とのこうした愛着関係を通じて、「内的作業モデル(internal working model)」を形成する。これは、他者は自分を受け入れて守ってくれる存在なのか、あるいは、自分は何かあった時に守られたり助けられたりしてもらえる存在なのか、愛してもらえる存在なのか、といった自己や他者に対する信念や期待を含んだ主観的確信のことをいう(遠藤, 2018)。子どもはこの内的作業モデルを対人関係におけるテンプレートとして、さまざまな他者とのかわりに適用する。つまり、養育者との間で経験した関係をベースとして、他者への認知や行動、期待や信念といったものを方向付けていくのである(遠藤, 2018, 金政, 2003, 金政・大坊, 2003)。これは、Bowlbyが愛着について「ゆりかごから墓場まで」と述べたように、愛着が乳幼児期のみならず、個人が独立性を獲得したのちも、生涯を通じて存続しており、「愛着の継続性」を示している。子ども時代の養育者に対する愛着は、青年期になると、仲間に対する絆に変わり、成人期では通常、パートナーや親友へ向けられる。最終的に老年期では、親から子どもへ、年長者から年少者へと変化を遂げるのである(Prior & Glaser, 2006 加藤訳2008)。

2-2 愛着スタイル

この内的作業モデルは、それを持つ子どもが愛着対象との間の相互作用として起こる行動パターン、つまり、愛着スタイルとして表れる。Ainsworth, Blehar, Waters,

1) 法務省矯正局名古屋刑務所

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

& Wall (1978) はこれをもとに、9か月から18か月までの乳幼児を観察実験した新奇場面法(ストレンジ・シチュエーション法 Strange Situation Procedure; SSP)によって典型的な3つの愛着スタイルがあることを示した。それは、①安定型 (Bタイプ; secure) ②回避型 (Aタイプ; avoidant) ③アンビバレント型 (両価型/抵抗型) (Cタイプ; ambivalent/resistant) である (のちに、追加として、Main & Solomon (1986, 1990) によって、④無秩序・無方向型 (Dタイプ; disorganization・disorientation) が見出されている)。

2-3 成人の愛着スタイル研究

このように、愛着は乳幼児期の研究から始まったが、1980年代半ば過ぎからは、成人期における親密な対人関係でのさまざまな行動を説明する際にも用いられるようになった。それは、上述のように、愛着理論は、パーソナリティの生涯発達にかかわり、愛着スタイルによってさまざまな行動が説明できるとされるからである (Bowlby, 1969, 1973, 1980)。成人期における愛着スタイルの測定は、ストレンジ・シチュエーション法のように乳幼児が実際に表出する愛着行動を観察するというわけにはいかない。乳幼児の場合、愛着対象に近寄っていき抱きついたり、あるいは、対象がいないと泣き叫んだりといった客観的に観察可能な行動を示すのに対し、成人の場合、そういった内在化された表象が目に見える形で表出されることはほぼなく、行動レベルでの測定は不可能だからである。そこで、成人の愛着研究は、自己報告型の尺度法やインタビューを用いて測定する方法へと発展した (金政, 2003)。こうして、成人の愛着スタイルを測定する試みとして、Hazan & Shaver (1987) の質問紙によるアダルト・アタッチメント尺度が作成されたのを契機に成人愛着研究が急増し、成人愛着スタイル研究として進展してきた (e.g., Mikulincer & Shaver, 2007)。

Hazan & Shaver (1987) は、上記の Ainsworth et al. (1978) によって確認された幼児期における3つの愛着スタイル (①安定型 ②回避型 ③アンビバレント型) の特徴がそれぞれ記述されている文章を対象者に読ませ、自分に最も当てはまるものを1つ選択させることで成人の恋愛における愛着スタイルを決定する尺度を開発した。ただし、この尺度は、単一項目による強制選択法であり、内的信頼性に疑問が残るなどの問題点が指摘されている (Simpson, 1990)。

Bartholomew & Horowitz (1991) は、Bowlbyの主張する内的作業モデルを基に、「自己についての内的作業モデル (自己観)」および「他者についての内的作業モデル (他者観)」の2軸を想定し、各軸がそれぞれポジ

ティブかネガティブかで愛着スタイルを類型化する2次元4分類モデルを唱えた。4つの愛着スタイルとは、①安定型 (secure; 自己観および他者観がポジティブ) ②拒絶型 (dismissing; 自己観がポジティブ・他者観がネガティブ) ③とらわれ型 (preoccupied; 自己観がネガティブ・他者観がポジティブ) ④恐れ型 (fearful; 自己観および他者観がネガティブ) である (Figure1) (脚注参照)。彼女らは、この4種類の愛着スタイルの特徴が記されている4つの文章を調査対象者に読ませ、自分に当てはまるものを強制的に1つ選択させて愛着スタイルを測定する「関係尺度 (Relationship Questionnaire; RQ)」を作成した。このほかにも数多くの愛着スタイル尺度が生まれる一方で、どの尺度が最も適切なかが判断できないという弊害も起こるようになった (e.g., Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。

この問題を解決したのが、Brennan et al. (1998) によって開発された多項目の「親密な対人関係体験尺度 (the Experiences in Close Relationships inventory; ECR)」(日本語版 ECR は中尾・加藤 2004a) である。Brennan et al. (1998) は、分析の結果、Bartholomew & Horowitz (1991) が示した“自己観”に対応する「見捨てられ不安 (anxiety)」と、“他者観”に対応する「親密性の回避 (avoidance)」の2次元を抽出した (Figure1)。これは、妥当性と信頼性が確認され、今日ではほとんどの研究者が共通して用いる規準的尺度となっている (中尾, 2012)。ただし、ECRは愛着対象が恋人と限定されていることから、わが国では、一般化された他者を対象として「一般他者版愛着スタイル尺度 (ECR-GO)」(中尾・加藤, 2004b) が作成され、さまざまな研究に広く用いられている。

3. 性犯罪者と愛着スタイル

3-1 性犯罪者と愛着理論

性犯罪者を理解するために、過去数十年にわたって、数多くの理論やモデルが検討されてきた。それは、性的逸脱行動の発現と維持を説明する包括的なアプローチ (Finkelhor, 1984, Hall & Hirschman, 1991, Marshall & Barbaree, 1990) から、たとえば、社会構造との関係といった、1つの因果関係に焦点を当てた単一因子理論 (Brownmiller, 1975, Herman, 1990) までである (Ward, Hudson, Marshall, & Siegert, 1995)。こうしたさまざまな研究により、現在は、性犯罪者に共通する要因は多数あり、単一因子で説明できるものではないという意見が主流である。

Bowlby (1969) が幼少期の愛着行動とその後の性的

な行動の間には緊密なつながりがあると示唆しているのは広く知られているところである。Marshallは、性加害行動にこの愛着理論の概念を応用した先駆者である (Marshall, 1989, 1993, Marshall & Barbaree, 1990)。Marshallの理論は広く世界に受け入れられており、彼がカナダで開発に携わっている性犯罪者への治療プログラムは世界各国で採用されている。現在、わが国の刑務所で実施されている国内初の行政による「性犯罪者処遇プログラム」もその1つである (法務省, 2006)。

さて、Marshallによれば、性犯罪者は愛着の問題を有しており、幼少期から成人期にかけての不安定な愛着 (insecure attachment) が特徴だという。幼少期に親との安定した愛着体験ができず、他者と適切かつ親密な関係を結ぶための対人スキルや共感性、自尊感情等の発達に失敗した結果、不安定な愛着スタイルが形成される。それが、青年期・成人期に性的に不適切な方法で他者との親密さを求めるために、性加害につながるというのである (Marshall, Hudson, & Hodkinson, 1993)。また、Marshallは、不安定な愛着を持つ人々 (特に男性) は、主として性的活動を通して他者との親密性を獲得しようと試みると主張しており、性犯罪者における親密性の欠如を非常に重視している。その後のさまざまな研究においても、不安定な愛着による親密性の欠如が性犯罪者の顕著な特徴であることは支持されている (e.g. Seidman, Marshall, Hudson, & Robertson, 1994)。

さらにMarshallは、成人として他者と親密性を構築できない場合、孤独感が生じると主張している。この孤独感は、攻撃性をもたらし、性加害にまで及ぶ可能性もあるという (Marshall, 1989, 1993, Marshall et al., 1993)。これ以前の研究でも、孤独感は他者に対する敵対的な態度と攻撃行動につながる (Diamant & Windholz, 1981,

Zilboorg, 1938) と言われてきている上、女性に対する暴力と敵意の受容と有意に関連していることも見出されてきた (Check, Perlman, & Malamuth, 1985)。

このように、Marshallは、性犯罪者における早期発達の影響の重要性について愛着理論の視点から論じ、親密性の欠如と孤独感の問題を示唆したのである。こうしたMarshallの見解を支持する研究は多数あり (e.g. Bumby & Hanson, 1997, Garlick, Marshall, & Thornton, 1996, Marshall & Mazzucco, 1995, Seidman et al., 1994)、性犯罪者は他の罪名の犯罪者や非犯罪者 (一般の人々) よりも、他者との親密性の構築が困難で、孤独感が高いことが報告されている。

Marshall以後も、Smallbone (2006b), Smallbone & Dadds (1998) は、幼少期の不安定な愛着スタイルは、感情統制や共感性、他者視点取得、問題解決能力などの不全につながり、成人期における不適切な愛着スタイルの形成へと発展することを見出している。そして、この不適切な愛着スタイルが、対人関係を築こうとする際、強引な行動となり、性加害につながるやすいと、Marshallの理論を援用して説明している。さらに、Ward, Hudson, & France (1993) は、複数の小児わいせつ犯の犯行理由についてのセルフレポートを調査した結果、性的動機のみならず、性加害に及ぶ第2の事由として親密性の構築があることを見出している。こうした性犯罪者の加害行動の背景には、彼らが養育者による質的に貧しい愛着を経験してきたことを裏付ける、養育者による早期からの暴力やネグレクトを特徴とする機能不全の家族歴の存在があるという (Marshall et al., 1993)。

一方、わが国において、性犯罪と愛着の関係について論じたものに、藤岡 (2006) がある。彼女によれば、たいていの性犯罪者は独特の認知様式、感情の乏しさ、そ

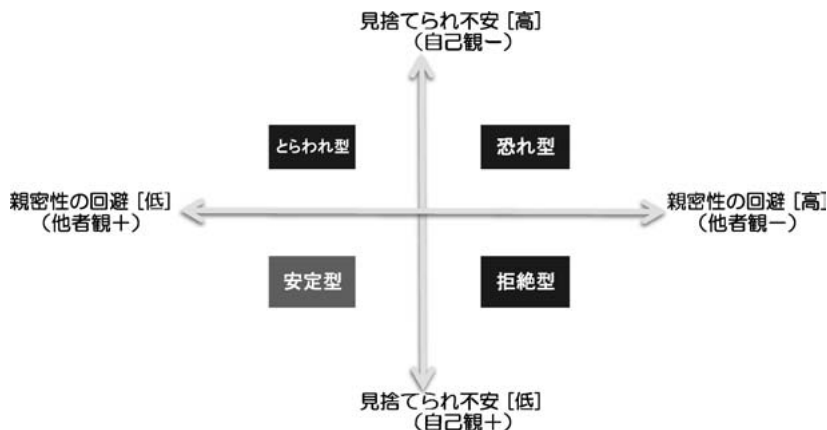


Figure 1 成人愛着スタイル4類型

こから生じる対人関係と自己評価の問題が4点セットのように認められるという。そして、この特徴は愛着障害のある者にも生じる傾向であるとし、性犯罪者と愛着の問題に関連性があると主張した。また、星・河野 (2018) は性犯罪者の方が他の罪名の犯罪者よりも、愛着スタイルが不安定であることを見出ししている。また、星・松村 (2013) は事例分析を通して、性犯罪者と母親との間の愛着の問題を示唆している。

以上のように、性犯罪者において幼少期における養育者（主に母親）との愛着がいかに重要であるのかが理解できる。こうした愛着の問題は、成長過程の中で、特に対人関係能力やスキル、自尊感情等の自己イメージの発達を阻害し、さらに、それが成人期へと継続され、性加害につながる要因となっていくのである。

3-2 性犯罪者の愛着スタイル

一方で、Marshallの性犯罪者と愛着にまつわる理論の限界点についていくつか報告されている (Ward et al., 1995)。その中でも目を引くのは、愛着スタイルとの関連である。多くの研究者が愛着スタイルを3類型ないし4類型に分類している (e.g. Bartholomew & Horowitz, 1991, Main, Kaplan, & Cassidy, 1985) が、Marshallはこの分類を応用していない。その上、各愛着スタイルがそれぞれ異なる形で親密性の欠如の問題に結びつき、その結果として、攻撃性の表出方法、つまり、犯行パターン（手口）や性加害対象（被害者）も変わるという可能性を明確にしていないという。

その後の研究において、こうした限界点もふまえて、性犯罪者と愛着スタイルについて、さまざまなアプローチの研究が生まれてきた。大別すると以下の4点になるだろう。

- ①性犯罪者群と一般群（犯罪をしていない一般の人々）の比較研究
- ②性犯罪者群と非性犯罪者群（性犯罪以外の罪名の犯罪者）の比較研究
- ③性犯罪者内における犯行パターン別の比較研究（例：強姦犯群と小児わいせつ犯群）
- ④愛着スタイル類型別の比較研究（3類型もしくは4類型）

まず、①であるが、Smallbone, & Dadds (1998) によれば、性犯罪者群は一般群と比較して、幼少期における父親および母親への愛着スタイル、また、成人期における一般他者への愛着スタイルが不安定だという。これは、Marshall (1989) や Ward et al. (1995) などの知見と同様である。つまり、性犯罪者は一般の人々よりも、安全

でない幼少時代を過ごし、それが成人期においても継続し、安全でない対人関係を結ぶ結果となったといえる。ただし、この結果とは異なる研究も複数ある。たとえば、Jamieson, & Marshall (2000) によれば、性犯罪者の中でも、身内の子どもを対象としたわいせつ犯群と一般群とでは愛着スタイルに差がないという結果も出ている。

②については、これまでMarshallを始めとしたさまざまな研究者が性犯罪者の目立った特徴として愛着スタイルの不安定さを主張してきた。これは、言い換えれば、他の罪名犯よりも性犯罪者の方がそうした傾向が高い可能性があるとも言え、Smallbone, & Dadds (1998) も、性犯罪者と財産犯の比較からこの見解を一部支持している。一方で、Jamieson, & Marshall (2000) は、性犯罪者群と非性犯罪者群との間に愛着スタイルの差はなく、犯罪者の大部分は不安定型であるとの見解を示している。これには、Ward, Hudson, & Marshall (1996) も、財産犯のみならず、粗暴犯、非粗暴犯も不安定な愛着スタイルを示す傾向が高いと示唆しており、不安定な愛着は性犯罪者特有の特徴ではなく、犯罪者の持つ一般的な脆弱要因であると述べている。

続いて、③については、特に、小児わいせつ犯と（成人女性が被害者である）強姦犯とに分類・比較されるケースが多く、Smallbone, & Dadds (1998) は、小児わいせつ犯は不安型もしくは回避型、強姦犯は回避型の愛着スタイルの特徴を示しやすいとした。さらに、小児わいせつ犯でも、身内の子どもを対象としたわいせつ犯と、身内外の子どもを対象としたわいせつ犯とに細分化されるパターンが多い。Jamieson, & Marshall (2000) は、身内を対象とした小児わいせつ犯は安定型、身内外を対象とした小児わいせつ犯は恐れ型の愛着スタイルである傾向が高いことを示した。さらに、愛着スタイルと攻撃性との関連から、身内を対象とした小児わいせつ犯は一般群と、身内外を対象とした小児わいせつ犯は非性犯罪者群と質的に類似しているとし、これは多く先行研究と同様の結果だという。

最後に④であるが、分析アプローチの方法が、これまでのように罪名からではなく、愛着スタイルの類型からである。Jamieson, & Marshall (2000) によれば、恐れ型に分類されるのは、身内外を対象とした小児わいせつ犯が、身内を対象とした小児わいせつ犯および一般群よりも有意に多い一方で、安定型、拒絶型、とらわれ型には有意差がないことを示している。

4. 性犯罪者の愛着スタイル研究における課題

4-1 先行研究の問題点

以上のように、性犯罪者と愛着スタイルの研究は、主に4つのアプローチに大別できたが、これらを概観すると、必ずしも一貫した結果となっていないことがわかる。この背景には、4つのアプローチ方法が混在しており、それぞれの結果を同等に比較検討できないといった問題点が浮かび上がってくる。

たとえば、②でいえば、「非性犯罪者群」となっているが、その詳細は、ある研究では財産犯のみであったり、また別の研究では粗暴犯のみであったりなど、同じ「非性犯罪者群」でも実際は対象が異なっており、一概に比較できないだろう。同様のことは、③のように、性犯罪者群を犯行パターンで分けている場合であっても、研究によっては、たとえば、小児わいせつ犯のみで構成されているものを一括して「性犯罪者群」としているものが多数見受けられる。これでは、小児わいせつ犯のみならず、強姦犯、盗撮犯など、さまざまな犯行パターンが含まれる「性犯罪者群」研究との区別がつかない。同じ性犯罪者でも、たとえば、小児わいせつ犯と強姦犯は異なる資質と問題性を抱えている (Smallbone, 2006a) ことをふまえると、対象者については慎重に吟味しなければならない。また、愛着スタイルを測定する際、さまざまな尺度が使用されている点も挙げられる。上述のように、Brennan et al. (1998) のECRが規準的尺度といわれているものの、性犯罪者における愛着スタイル研究では、質問紙法のみならず、インタビュー方式で査定する方法なども多い。その結果として、④で挙げられたように、愛着スタイル3類型と4類型の研究が混在することになる。さらに、性犯罪者といった特殊な対象者であることから、一つの研究における調査人数が少なくなりがちなのも問題である。

こうした問題点に加え、特筆すべきなのは、性犯罪者における愛着スタイル研究が星・河野 (2018) のほか、わが国ではほとんど見当たらないという点である。平成18年に法務省で性犯罪者処遇プログラムが開始されてから、性犯罪に関連する研究が増えてきたというものの、ほとんどが矯正施設における性犯罪者の処遇レポートやプログラムの効果検証といったものである。愛着スタイルに限らず、わが国では性犯罪者の性格や特性を扱った実証的研究がほとんどないのが現状である。

4-2 今後の課題

愛着スタイルとは、その個人のパーソナリティの土台となって認知・思考・感情・行動あらゆる面に影響を与

えている。ゆえに、個人のさまざまな側面における資質上の特徴を把握する上で重要な概念といえる。不安定な愛着スタイルを持つ者は、自分のニーズを満たすために対人関係の状況を利用することに非常に長けており (Bartholomew & Horowitz, 1991)、こうした問題ある対人関係に介入する場合、まずはその個人が持つ愛着スタイルについてきちんと把握する必要がある (Jamieson, & Marshall, 2000)。それは、性犯罪者にもいえることであり、彼らを理解し、治療するためには、事前に愛着スタイルを査定し、その個人が持つ問題性を捉えた上で、愛着に注目した治療を行うことが有用であろう。愛着を考慮に入れない治療は失敗することが多く、犯罪者に限らず、不安定型愛着に対する治療というのは、今のところ未発達分野 (岡田, 2011) であるため、愛着スタイルに関する研究と臨床実践は、今後ますます重要になってくるといえる。

今回のように、国内ではほとんど実施されていない性犯罪者における愛着スタイルの研究について、海外の先行研究を概観し整理することは、今後、わが国で実証研究を進展させていく上での基礎となる。理論とデータに基づいた研究が積み重ねられることにより、性犯罪者の人格や特性を理解した上で、彼らが二度と犯罪に及ぶことなく、より良い人生を送るために必要不可欠な治療へとつなげることができ、ひいては、安全な社会の構築へと進展させることができるのである。

脚注

Hazan & Shaver (1987) の3類型モデル (①安定型 ②回避型 ③アンビバレント型) について、Bartholomew & Horowitz (1991) の2次元4類型モデルでは、それぞれ①安定型②拒絶型と恐れ型 (2つに分化) ③とらわれ型に対応すると考えられている (金政, 2003)。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 226-244.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books.

- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol.3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Ed.), *Attachment theory and close relationships*. (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- Brownmiller, S. (1975). *Against our will: Men, women and rape*. New York: Simon & Schuster.
- Bumby, K. M., & Hanson, D. J. (1997). Intimacy deficits, fear of intimacy, and loneliness among sexual offenders. *Criminal Justice and Behavior*, *24*, 315-331.
- Check, J. V. P., Perlman, D., & Malamuth, N. M. (1985). Loneliness and aggressive behavior. *Journal of Social and Personal Relationships*, *52*, 243-252.
- Diamant, L., & Windholz, C. (1981). Loneliness in college students: Some theoretical, empirical and therapeutic considerations. *Journal of College Students Personality*, *22*, 515-522.
- 遠藤 利彦 (2018). アタッチメント理論における基点と現代的展開 こころの科学, *198*, 10-16.
- Finkelhor, D. (1984). *Child sexual abuse: New theory and research*. New York: Free Press.
- 藤岡 淳子 (2006). 性暴力の理解と治療教育 誠信書房
- Garlick, Y., Marshall, W. L., & Thornton, D. (1996). Intimacy deficits and attribution of blame among sexual offenders. *Legal and Criminological Psychology*, *1*, 251-258.
- Hall, G. C. N., & Hirschman, R. (1991). Toward a theory of sexual aggression: A quadripartite model. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *59*, 662-669.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*(3), 511-524.
- Herman, J. L. (1990). Sex offenders: A feminist perspective. In W. L. Marshall, D. R. Laws, & H. E. Barbaree (Ed.), *Handbook of sexual assault: Issues, theories, and treatment of the offender* (pp. 257-271). New York: Plenum.
- 法務省 (2006). 性犯罪者処遇プログラム研究会報告書 法務省 Retrieved from <http://www.moj.go.jp/content/000002036.pdf> (2018年7月30日)
- 星 あづさ・河野 莊子 (2018). 性犯罪者の愛着スタイルと「現在の母親」との関係について 犯罪心理学研究, *56*(1), 47-59.
- 星 あづさ・松村 佑紀 (2013). グループワークにおける性犯罪受刑者の事例報告——母親表象の変化についての一考察—— 犯罪心理学研究, *51* (特別号), 58-59.
- Jamieson, S. & Marshall, W. L. (2000). Attachment styles and violence in child molesters. *Journal of Sexual Aggression—An international, interdisciplinary forum for research, theory and practice—*, *5*(2), 88-98.
- 金政 祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望——現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは——対人社会心理学研究, *3*, 73-84.
- 金政 祐司・大坊 郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, *74*(5), 466-473.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, *50*, 66-104.
- Main, M., & Solomon, J. (1986). Discovery of an insecure-disorganized/disoriented attachment pattern. In T. B. Brazelton, & M. W. Yogman (Ed.), *Affective development in infancy*. (pp. 95-124). Westport, CT, US: Ablex Publishing.
- Main, M., & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Ed.), *Attachment in the Preschool Years: Theory, Research, and Intervention*. (pp. 121-160). Chicago: University of Chicago Press.
- Marshall, W. L. (1989). Intimacy, loneliness and sexual offenders. *Behaviour Research and Therapy*, *27*, 491-503.
- Marshall, W. L. (1993). The role of attachments, intimacy, and loneliness in the etiology and maintenance of sexual offending. *Sexual and Marital Therapy*, *8*, 109-121.
- Marshall, W. L., & Barbaree, H. E. (1990). An integrated theory of the aetiology of sexual offending. In W. L. Marshall, D. R. Laws, & H. E. Barbaree (Ed.),

- Handbook of sexual assault: Issues, theories, and treatment of the offender.* (pp. 257-271). New York: Plenum.
- Marshall, W. L., Hudson, S. M., & Hodgkinson, S. (1993). The importance of attachment bonds in the development of juvenile sex offending. In Barbaree, H. E., Marshall, W. L., & Hudson, S. M. (Ed.), *The juvenile sex offender*. (pp. 164-181). New York: Guilford Press.
- Marshall, W. L., & Mazzucco, A. (1995). Self-esteem and parental attachments in child molesters. *Sexual abuse: A journal of research and treatment*, 7, 279-285.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in Adulthood: Structure, Dynamics, and Change*. New York: Guilford Press.
- 中尾 達馬 (2012). 成人のアタッチメント——愛着スタイルと行動パターン——ナカニシヤ出版
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004a). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004b). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の研究 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 岡田 尊司 (2011). 愛着障害——子ども時代を引きずる人々—— 光文社
- Prior, V., & Glaser, D. (2006). *Understanding attachment and attachment disorders: Theory, evidence and practice*. London: Royal College of Psychiatrists.
- (プライア, V. ・グレイサー, D. 加藤 和生 (監訳) (2008). 愛着と愛着障害——理論と証拠にもとづいた理解・臨床・介入のためのガイドブック——北大路書房)
- Seidman, B., Marshall, W. L., Hudson, S. M., & Robertson, P. J. (1994). An examination of intimacy and loneliness in sex offenders. *Journal of Interpersonal Violence*, 9, 518-534.
- Simpson, J. A. (1990). Influence of attachment styles on romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59(5), 971-980.
- Smallbone, S. W. (2006a). An attachment-theoretical revision of Marshall and Barbaree's integrated theory of the etiology of sexual offending. In W. L. Marshall, Y. Fernandez, L. Marshall, & G. Serran (Ed.), *Sexual Offender Treatment: Controversial Issues* (pp. 93-107). England: John Wiley & Sons Ltd.
- Smallbone, S. W. (2006b). Social and psychological factors in the development of delinquency and sexual deviance. In H. E. Barbaree, & W. L. Marshall (Ed.), *The juvenile sex offender* (2nd ed., pp. 105-127). New York: Guilford Press.
- Smallbone, S. W., & Dadds, M. R. (1998). Childhood Attachment and Adult Attachment in Incarcerated Adult Male Sex Offenders. *Journal of Interpersonal Violence*, 13, 555-573.
- Ward, T., Hudson, S. M., & France, K. G. (1993). Self-reported reasons for offending behavior in child molesters. *Annals of Sex Research*, 6, 139-148.
- Ward, T., Hudson, S. M., & Marshall, W. L. (1996). Attachment styles in sex offenders: A preliminary study. *The journal of sex Research*, 33(1), 17-26.
- Ward, T., Hudson, S. M., Marshall, W. L., & Siegert, R. (1995). Attachment Style and Intimacy Deficits in Sexual Offenders: A Theoretical Framework. *Sexual Abuse: A Journal of Research and Treatment*, 7(4), 317-335.
- Zilboorg, G. (1938). Loneliness. *Atlantic Monthly*, 14-19.

ABSTRACT

Trends and perspectives in research on the attachment styles of sex offenders

Azusa HOSHI and Shoko KONO

In recent years, sexual offenses have been attracting attention in society. According to Marshall, W. L., sex offenders have problems with attachment characterized by insecure attachment throughout early childhood to adulthood. This insecure attachment style is formed as a result of being unable to experience secure attachment to their parents in early childhood and thus failing to develop feelings of self-esteem and interpersonal skills necessary for building appropriate and intimate relationships with others. This leads to sexual assaults as they seek intimacy with others in an inappropriate way during adolescence and adulthood (Marshall, Hudson, & Hodkinson, 1993). Following this research, studies from various approaches have been conducted on sex offenders and their attachment styles. Those studies fall roughly into the following four categories:

- (1) Comparative research between a sex offender group and a general group (individuals from the general public who have not committed criminal offenses)
- (2) Comparative research between a sex offender group and a non-sexual offender group (offenders who have committed criminal offenses other than sexual offenses)
- (3) Comparative research between offense patterns among sex offenders (e.g. a rape offender group and a child-sex offender group)
- (4) Comparative research between attachment style types (three or four types)

An overview of these studies indicates that they have not necessarily yielded consistent results. This is accounted for by the fact that it is impossible to compare the results against each other on an equal basis due to the intermingling of the four different approaches.

Attachment styles form the foundation of each individual's personality and affect every aspect including cognition, thinking, emotion, and behavior. This is true for sex offenders as well. To understand them and offer treatment, assessing their attachment styles in advance and grasping the issues each person has will be helpful. Considering the factors mentioned above, research on the attachment styles of sex offenders is expected to become increasingly important in the future.

Key words: sex offence, sex offender, attachment, adult attachment, attachment style